



鈴木 哲朗
(気仙沼市教育委員会提供)

「海つてすごいなあ。魚が、いっぱいいわき出してくる……。」
哲朗は、幼いころから、紀州の漁師たちが鳥の羽を用いた擬餌針や生きて
いるいわしを餌にして、今の気仙沼地域にかつおの一本釣りや広めた話を
祖父から聞くのが大好きでした。いつしか海と共に生きる者として、自分
も何かできないものかと考えるようになっていきました。

鈴木哲朗は、本吉郡唐桑村（現在の気仙沼市）の先祖代々にわたってこの地方の海での生活を支えた旧家（海
産物商）に生まれ、恵まれた環境に育ちました。父は県議会議員を務め、明治維新で活躍した勝海舟や榎本武
揚とも親交がありました。

哲朗が育ったころの日本は、幕末から明治という、ヨーロッパやアメリカなどに負けない国にするために、
外国の進んだしくみや技術、文化などをどんどん取り入れていった時代です。哲朗は新聞や大人たちの会話が
ら日本が大きく変わっていく様子を知るたびに、「いつか、この目で世界を見てみたい、自分もアメリカで学
問を学んでみたい。」という思いが、日に日に大きくふくらんでいきました。

哲朗が家族の猛反対を押し切ってアメリカへ留学したのは二十二歳の時、東京の英吉利法律学校（現在の中
央大学）で法律を学んだのち、故郷に帰り結婚してすぐのことでした。

家からの仕送りは一切なく、慣れない英語での会話にとまどいながらも、昼は洋品店で働き、夕方から夜遅
くまで勉強しました。哲朗には知りたいこと、勉強したいことが山ほどありました。それでも、空腹や疲れに

負け、くじけそうな時もありました。しかし、休んでいる暇はありません。そんな時は、決まって目を閉じて
故郷に思いをはせます。きらめく海と潮の香り、光る魚の群れと漁師たちの威勢のよいかけ声、そして、家を
守る妻のことでした。哲朗は、漁法、養殖、社会学、経営学、植林など、さまざまな分野の勉強に挑戦し続け
ました。

大きな希望を胸に抱いて帰国したのは、それから三年後でした。

当時、唐桑の漁民の生活は、細々としたもので、現金収入は少なく、働いても働いても、暮らしに困る家
が多くありました。村の人々のくらしの大変さがひしひしと伝わってきます。漁業は昔ながらのやり方で行わ
れ、魚に出ない日もありました。理由は、魚を釣っても、売り先が限られ、腐らせてしまうからです。

（魚は海からの恵みだ。……何か、生かせる方法はないだろうか……。そうだ。加工場をつくらう。村人の働
き口や現金収入を増やすこともできるぞ。どんどん魚をとる方法も考えな
くては……。）

哲朗は、これまでの習わしにとられることなく、アメリカで学んだ知識
を生かして、新しい漁業や水産業の方法を考え出していきました。

巾着網の研究にも取りかかりました。まずは小さい模型を作り、実際に
網を組み立て、次に、海に入れ、できればえを何度も何度も試す、その繰り返し
です。なかなか思うようにはいきません。改良に改良を重ねる試行錯誤の
日々が続きました。それでも途中で投げ出すわけにはいきませんでした。昼
は家業の仕事、夜は水産学、魚の売り先や買い付け資材について、ここでも
寝る間をおして研究を続けました。そしてついに、網の改良に成功したの
です。鮪、鯉、鰯の漁獲量は増え、加工場の建設も順調に進んでいきました。



紀州……
現在の和歌山県、
三重県南部のあた
り。

擬餌針……
羽毛・魚皮を、虫
小魚などの生きた
えさに似せて作っ
た釣り針。

明治維新……
江戸時代末・幕末
から明治時代初期
に日本を近代国家
に発展させるため
に進められた政治
経済、社会の大き
な改革のこと。

勝海舟……
幕末・明治の政治
家。

榎本武揚……
明治時代の政治家。
通信（郵便・通信
などを扱う）・外
務・文部の各大臣
を務めた。

唐桑……
現在の気仙沼市。

巾着網……
巻き網の種類。



試行錯誤……
いろいろ試して失
敗をかさねながら、
だんだん正しいや
り方に近づくとこ
ろ。

加工場の建設も、網の研究も、たくさんのお金が必要でした。哲朗は一生懸命に働き、私財をつぎ込みました。いつしか、この地方きつての水産事業家として成功していきました。しかしながら、哲朗は、現状に満足することなく、次々と新しい事業に果敢に取り組んでいったのです。

ところが、そんな哲朗の姿を心配する声や心ない声、しだいに聞かれるようになりました。

「次々、新しいことに挑戦してつけど、あんなに手広く商売を広げて、失敗したらどうすんだ。」

「何も、今のままでも十分でねえのが。借金こさえて、加工場つぶれたら、働き口がなくなってしまう。」

「金があつから、いろんなことできんだあ。金持ちの道楽だべ。」

それらの声は、哲朗の耳にも届くようになっていました。さらに、哲朗が発案した定置網漁の船員もなかなか思うように集まらず、哲朗の友人や親戚からも心配の声があがり、忠告する人もいました。

哲朗は、一人浜辺に立ち、寄せては返す波の音を聞きながら、考えこむ日が多くなっていきました。

ある夜、妻が心配して

「だいじょうぶですか。」

とたずねました。哲朗の表情は厳しいものでしたが、おだやかな声で話しはじめました。

「三陸の海はいい海だ。魚もたくさんとれる。この地域の者は、古くからこの海の恵みをうけてきた。でも、昔とおんなじ漁のままじゃだめなんだ。今、時代は動いている。みんなの、そして、将来につながる方法でやっていかなければならない。……失敗もあるし、金もかかるが、それを恐れていては、何もできない。だが、やらなければならぬ。……わたしはわたしがやれることをやるだけだ。」

前をしっかりと見すえ、凜とした哲朗の姿に、妻は黙ってうなずきました。

哲朗は、その夜も、月夜に輝く夜の海を、いつまでもいつまでもながめていました。



魚付き林 (気仙沼市唐桑 半造)

哲朗は、今まで以上に研究や仕事に励むようになりました。船員を集めるため、遠くまで足を運び、若者たちに、これからの漁法のあり方や漁業に情熱を傾けるよう、根気強く説いてまわりました。また、魚付き林や保安林としての植林の大切さを村民に訴え、半造や陣ヶ森に松や杉を植えさせました。気仙沼地方ではじめての蒸気船や石油発動機船の購入に踏み切り、遠洋漁業にも挑戦しました。不漁が続く厳しい時は、網元たちを説得し、資金や物資を集めて、地域の力を結集させるなど、常に先頭に立って働いていきました。

昭和八年、哲朗は六十八歳で亡くなりました。多くの事業を成功させ、県や村の要職も務めました。決しておごることなく、誰に対しても礼儀正しく、誠心誠意に接する姿は、生涯変わらなかつたといえます。目上の人にももちろんのこと、道で会った子どもにも帽子をとっていいねいあいさつをしたといわれています。

哲朗の思い描いた夢とその実現を支えた志は、この地の漁業振興と水産業発展の新たな道しるべを示したのでした。

鈴木哲朗

鈴木哲朗は、慶応二(一八六六)年、本吉郡唐桑村(現在の気仙沼市)に生まれた。新しい漁業の方法を研究し続け、水産業と地域の発展のために力をつくした。その功績が認められ、大正十四年に実業功労者として藍綬褒章を受賞し、天皇陛下に拝謁した。国立公園となり、全国的に知られる巨釜半造の風光明媚な美林も哲朗の功績が大きいとされている。

私財…
自分の財産。

果敢…
決断力に富み大胆なこと。

道楽…
本業以外のことや、趣味などに熱中して楽しむこと。

定置網…
一定の場所に網を常に設置して、魚を誘い入れてとる漁法。

凜とする…
態度や姿などがきりっとひきしまっている様子。

魚付き林…
繁殖や保護のために、海岸などにつくられた森林のこと。魚の群れが集まりやすい。

石油発動機船…
石油を燃料として動く船のこと。(発動機船のない時代は人力と風力で動かしていた。)

遠洋漁業…
数週間から数ヶ月、一年以上かけて大型漁船で、遠くの漁場で行われる漁業。

藍綬…
社会や国のために大きな功績のあった人に国からおくられる栄誉の一つ。

拝謁…
君主など高貴な人にお目にかかること。

風光明媚…
自然の景色が美しいこと。